

## 被災地から問われる包括的福音

——ローザンヌ運動の視点から——

西岡義行

東日本大震災の被災地に身を置き、支援活動に励む方々や現地の牧師に、わずかでも耳を傾けるとき、驚かされるのは教会や宣教のあり方のみならず、キリスト者の存在の意味自体が問われていることである。包括的福音を掲げつつも、私たちの存在が本当に福音となっているのが、被災された方々の声なき声として聞こえてくるように思える。本論考では、ローザンヌ運動が強く掲げてきている包括的福音について概観し、改めて今問われていること、問わなくてはならないことごとを整理し、その課題に目を向けたい。

### 1. ローザンヌ運動の歩み

福音への包括的理解が20世紀の福音派において明示されたのは、1974年のローザンヌ世界宣教会議であった。ローザンヌ運動の中心的なスローガンは「全教会が全世界に全福音を」である。「全」に込められていることは、人の魂だけにかかわるのではなく、全人的なかかわりの中で福音を伝えることである。この包括的理解へどのような経緯で進んでいったのか、また、その後どのように展開されていったのか、またされていかなかったかを素描したい。

## 1. ローザンヌ前史

第三回のローザンヌ世界宣教会議が2010年10月にケープタウンで開催された。エキュメニカルな「世界宣教会議」がちょうど百年前の1910年にエディンバラで開催されたという、歴史的節目であったことは意義深い。20世紀の初頭に、教派の伝統を超えて宣教のビジョンで一致したことは、宣教の歴史において大きな出来事であった。しかし、この会議には楽観主義的傾向が潜在し、必ずしも深い神学的検証がなされたとはいえなかった。実際に、人類史上未曾有の殺戮がなされようとする世界大戦が迫っているにも関わらず、そのような歴史的・社会的現実に対する預言者的使命を果たせなかったことは、否定できない。

こうしたことへの自己批判は、教会中心の宣教ではなく、社会的現実に対する宣教へとシフトすべきであるという声となっていった。しかし、この課題に取り組む中で、伝道を優先すべきか、社会の現実にまず答えるべきかという議論をめぐって神学的対立が次第に明らかになっていく。一方では、魂の救いこそが最優先すべきことであるとし、永遠と関わりをもたない、過ぎ去るべく地上のことには積極的に関わることを躊躇する動きが出てきた。他方では、魂を獲得する教会中心の宣教の結末は、社会の課題から遊離した教会となり、そこにおいては世における意義が失われているとして厳しく批判する人も出てきた。こうした対立は、伝道と社会的責任との分離という悲劇へと発展していった。主イエスの宣教には見られないこの不健全な分離は、その後のプロテスタントの宣教に暗い影を落とすことになっていった。

## 2. ローザンヌ世界宣教会議（1974年）

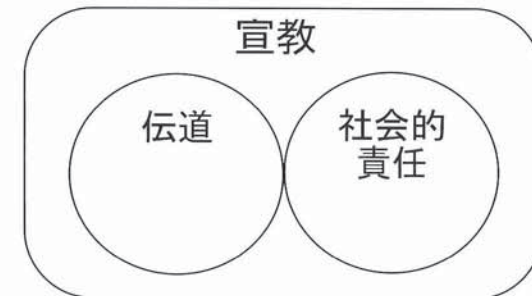
二十世紀中盤のこうした課題を克服するために、さまざまな動きが福音派の中で生まれ、その結実が1974年にスイスのローザンヌで開催された、世界宣教会議である。そこでは、もう一度福音の豊かさを見直し、聖書の権威とキリストの独自性を堅持しつつも、魂のみならず社会の現実をも変えていく福音の豊かな理解へと開かれていった。

その会議で発表されたローザンヌ誓約（Lausanne Covenant）は、福音の包括的理解を保守陣営の国際会議の公式文書として明示されたという意味で注目さ

れている。特に、第5項の「キリスト者の社会的責任」では、伝道が社会的責任と対立されて理解されてきたことへの悔恨の念が書かれ、分離ではなくより包括的な福音認識に立っていることは注目に値する。歴史的にも、大きな福音派の転換点ともいえる会議であった。その一部分を引用したい。

人は互いに利己的に利用し合うのではなく、尊敬しあい、仕え合うべきである。私たちはこれらの点をなおざりにしたり、時には伝道と社会的責任とを互いに相容れないものと見なしてきたことに対し、懺悔の意を表す。確かに人間同志の和解即神との和解ではない。社会的行動即伝道ではない。政治的解放即救いではない。しかしながら、われわれは、伝道と社会的政治的参与の両方が、ともにキリスト者の務めであることを表明する<sup>1</sup>。

ここでは、伝道と社会的責任とを対立的にみるのではなく、両者を含むより広い視野で宣教を捉えることへと踏み出している。神との和解と社会的・政治的和解の双方を含むより広い理解へと、福音派がシフトしたことは、この会議の最大の貢献のひとつである。こうした包括的な視点が明確に表明されたことは、1966年に開催されたホートン世界宣教会議以来、福音派の変化の中でもっとも顕著なものであった<sup>2</sup>。



<sup>1</sup> 「ローザンヌ誓約」宇田進『福音主義キリスト教とは何か』200頁。全文は196-208頁に所収。以下のH.P.でも、閲覧可能。<http://www.lausanne-japan.org/ローザンヌ誓約/>

<sup>2</sup> E. S. Utuk, "From Wheaton to Lausanne," p. 109.

その捉え方はその後もさまざまに議論されてきている。ジョン・ストットは「伝道」(Evangelism)と社会的活動(Social Action)とは、不可分の関係にあり、宣教(mission)に内包させるものとしている<sup>3</sup>。したがって、宣教の働きにおいて福音が伝えられるとき、それはイエス・キリストの福音を言葉で伝えるのと同時に、社会における行いにおいて福音が証しされるのが当然含まれるのである。そこに言葉と行為の分離はなく、一つとなることによって福音が福音として伝わっていくのだと理解されていった。

### 3. マニラ(1989年)からケープタウン(2010年)へ

ローザンヌ運動は「全教会が全世界に全福音を」(The whole church taking the whole gospel to the whole world)標語として展開されてきたと言えよう。この言葉は1974年に発表されたローザンヌ誓約の第6項に登場する。「世界伝道は、全教会が、全世界に、福音の全体をもたらすことを要求する。」<sup>4</sup> 第一回会議では必ずしも注目されなかったこの言葉は、1989年にフィリピンのマニラで開催された第二回の会議で重要なテーマとなった。この三つの「全」(whole)は、この会議で発表された「マニラ宣言」(Manila Manifest)の枠組み骨格となったのである。そして、福音を委ねられた私たちキリスト者の全て(全教会)が、全世界を網羅する世界規模のヴィジョンを掲げてひとつになろうと、呼びかけたのである。宣教の主体としての教会、対象としての世界、そして宣教の中身である福音への理解が広がり、同時にその多岐にわたる使命が明確に示され、個人も教会も宣教団体も全てが結集していった点で大きく評価できよう。

しかし、包括的福音に「生きる」という点で課題が残ったと、今では振り返ることができる。それは、福音派の教会の二十世紀における躍進と深く関係していると考えざるを得ない。確かに、主流派といわれる教会の低迷と比較すると、その躍進は目を見張るものがあった。しかし、次第に教会自体が自己目的化しその拡大と維持に心が奪われ、さらに宣教の成果が見えやすくなるために、福音が矮小化されてしまっていた。また、こうしたことへの神学的反省と宣教

<sup>3</sup> J. Stott, *Christian Mission in the Modern World*, pp. 25-30.

<sup>4</sup> 宇田進、『福音主義キリスト教とは何か』201頁

プロジェクトの実践とが、分離していったことは、この問題の改善を遅らせることになったのである。

この社会的責任をも含める包括的福音理解は、この2010年に出された『ケープタウン決意表明』において改めて強調された。とはいえ、この強調は、深い反省と自己批判抜きになされたのではない。議論されてはいても、実際には、真の意味での包括的歩みができていないことへの反省である。1974年の会議で出された福音理解および宣教理解における包括的な方向付けが、神学的にはどのような展開を経てきているのであろうか。

## II. 伝道と社会的責任の関係理解の変遷

伝道と社会的責任の関係については、様々な立場があり、分析もなされて来た。例えば、ストットは大まかに1)社会的奉仕は伝道のための手段、2)社会的奉仕は伝道の一表現である、3)両者はパートナーである、とする三つの視点を紹介している<sup>5</sup>。ところが、両者の関係については、その後のさまざまな議論がなされ、それらをまとめると、伝道の狭い始点と広い視点との間で、対立していったと見る事ができる<sup>6</sup>。

### 1. 福音の包括性と伝道の優先性

伝道をより狭く捉える視点によると、伝道はあくまでも福音を伝えることであり、個人および集団が福音を耳にする機会を提供し、イエス・キリストを救い主として受け入れることを目的とする。そして、伝道こそ優先されるべきものであり、そのことが社会的活動と混同されてはならないとする。しかし、より広く福音を捉える者にとっては、伝道そのものは社会的責任と不可分の関係にあり、伝道の狭い捉え方を強調することは、社会の課題とかわからない福音

<sup>5</sup> J. Stott, *Ibid.* pp. 26-27. この三つの視点は、1982年のグランドラピッツの会議で発表された文書にも引き継がれている。関西ミッション・リサーチ・センター(KMRC)/JEA編、『伝道と社会的責任—グランド・ラピッツ・レポート』梶野隆訳、19-21頁

<sup>6</sup> A. Tizon, *Transformation after Lausanne*, pp. 43-46.

宣教へと進み、その結果福音の矮小化となりうるとして強い懸念をもった。このように、広い福音理解の者は、狭い理解の立場に対して、ローザンヌ運動の貢献を受け止めるというより、むしろそれ以前の非包括的方向に逆戻りすることであると指摘した<sup>7</sup>。

ローザンヌ運動で強調された二つのこと、すなわち福音の包括性と伝道の優先性は、どのように主張されていったのだろうか。福音を伝えることの優先性の主張は、1974年のローザンヌ宣言では、第6項に述べられている。「犠牲的奉仕を伴う教会の宣教活動の中で、伝道こそ第一のものである」<sup>8</sup>。社会的責任の重要性を認めつつも、宣教の働きの中で、優先されるべきこと、あるいは最終的に重要なことは、イエス・キリストの贖いによる永遠の救いを伝えることだと主張される。この伝道の優先性と、包括的に福音を捉えることとどのように関わるのかは、その後の大きな課題となっていく。そうした議論の中で、次第に福音派の中に、伝道をより狭く捉え、伝道の優先性を強調する側と、伝道と社会的責任をより包括的に見ようとする側との間にある溝が深まっていったのである<sup>9</sup>。

この議論は、1975年にメキシコ・シティーでなされたローザンヌ継続委員会(Lausanne Continuation Committee)を皮切りに、1979年にはインドで福音的的社会活動をテーマに開催された神学会議において、1980年にはロンドンで「シンプル・ライフスタイル」に関する会議において取り上げられている<sup>10</sup>。さらに同じ年に二つの重要な会議が開催された。ひとつはメルボルンにおけるWCC(世界教会協議会)主催の宣教会議で、そこでは飢えと貧しさに苦しむ抑圧され者の叫びこそが最優先課題として取り上げられている。もうひとつは、ローザンヌ世界伝道委員会(LCWE=Lausanne Committee on World Evangelization)によって開催されたパタヤ会議(タイ)である。こちらでは、貧困に喘ぐ人々の

<sup>7</sup> Tizon, *Ibid.*, pp.46-47.

<sup>8</sup> 宇田進『福音主義キリスト教とは何か』201頁

<sup>9</sup> Tizon, *Transformation after Lausanne*, pp.48-49.

<sup>10</sup> 邦訳は、関西ミッション・リサーチ・センター(KMRC)/日本福音同盟(JEA)編『シンプル・ライフ・スタイルへのすすめ』(誰もが知りたいローザンヌ宣教シリーズ20) 三ツ橋信昌訳

叫びや難民などについても焦点が当てられていたものの、最優先課題は、福音を聞いたことのない人々に対して福音をまず伝えること、であった。両方の会議に出席した福音派の代表も少なくなく、彼らは、福音派の視野の狭さを嘆いた。それとは対照的に、あるものは終末における緊急性を強調し、いまだ福音を聞いたことのない地域への伝道の働きが急務であるとして、その優先性を強調した。このように、同じ福音派の中にある、対照的な二つの方向性は、いよいよ対立の方向へ進んでいった。

## 2. 両者の動的関係に向けて

こうした対立に正面から取り組んだ会議が1982年にグランド・ラピッツで開催された。この会議は、世界福音連盟(World Evangelical Fellowship=WEF)とローザンヌ世界伝道委員会(LCWE)の共催で開催され、「伝道と社会的責任との関係に関する協議会」(Consultation on the Relationship Between Evangelism and Social Responsibility=CRESR)をテーマとした。幅広い意見をまとめるために、それぞれの立場が真っ向からぶつかる形で議論されたため、もっとも緊張感の高いものだったといわれている。

この会議では、伝道と社会的責任の関係について二元論的に対立構造で見るのではなく、むしろそれらがどのように関わりあうかが強調された。それは、それまでの議論が、しばしば不健全な二項対立、すなわち、体と魂、個人と社会、創造と贖罪、自然と恵み、天と地、義認と正義、信仰と行いなどに強く影響されてきたからである。聖書に目を向けるなら、こうした二元論的対立よりも、より包括的に捉えられている。たとえば、福音書における神の国の福音は、神の恵みの支配を意味し、魂だけを扱う狭いものではなく、個人も共同体も、魂もその周りの共同体や社会・政治、さらには環境をも含む豊かな内容が含まれている。したがって、伝道も社会的責任も不可分であるばかりか、創造的緊張関係として動的に見ることがより健全な見方であるとされた<sup>11</sup>。

両者の動的関係は、三つの表現で表されている。第一に、社会的活動は伝道の結果であり、信仰が具体的行動に表されることは、ごく自然なことである。

<sup>11</sup> KMRC/JEA 編、『伝道と社会的責任』、17頁

それらの分離こそが問題である。第二に、社会的活動は、伝道への架け橋となりうるということである。もちろん、伝道するために、社会活動を戦略的あるいは作画的に取り入れよとすることは問題視された。心を開くのは神ご自身であるとすれば、人間がそれを予測し、計画に入れることは、神に対しても、人に対しても、分をわきまえた行動とは言えなくなるであろう。社会的奉仕の先にあることは、人間には未知のことといえる。第三は、伝道と社会的活動はパートナーとして常にともに存在するものとして理解される。それはさながらはさみが二つの刃が一つであるように、鳥の羽が二つでひとつであるように、夫婦の関係がそうであるように、違いがあるがお互いがお互いを必要とし両者がひとつとなることで宣教が進められるのである<sup>12</sup>。もちろん、ローザンヌが伝統的に強調してきた、伝道の優先性（優位性）は保持されている。とはいっても、それは時間的な意味での序列ではなく、論理的な位置づけとしてみている。すなわち、どちらが時間的に優先されるかではなく、より根源的で永遠と関わるのは伝道であり、実際に伝道によってキリストの救いを受けることなしに社会的活動はなしえない、ということである。グランド・ラピッツから出された文書には、以下のように優先性が表現されている。

われわれは肉体的飢餓を満たすか霊的飢餓を満たすかの間の、あるいは肉体を癒すか靈魂を救うかの間の選択をすることはまず減多にない。隣人に対する真正な愛は、その人に対する全人的奉仕にわれわれを導くからである。それにもかかわらず、もし先の両者の間の選択を迫られるなら、われわれは、全人類の至高のそして究極的な必要は、イエス・キリストの救いの恵みであり、それゆえに、ひとりの人の永遠的な靈魂の救いは、その人の現世的、物質的福祉以上に重要であるといわなければならない（II コリント 4：16-18 参照）<sup>13</sup>。

この会議では、はじめは対立的姿勢が強かったが、直接的な対話を通じて、

<sup>12</sup> 『伝道と社会的責任』、21-22 頁。E. R. Dayton, "Social Transformation," p.54 も参照。

<sup>13</sup> KMRC/JEA 編、『伝道と社会的責任』、21 頁

次第に排他的な言葉や福音の矮小化につながる還元主義的な見方に対して距離を置くようになった。さらに、全体として違った見方を持ちつつも、それぞれの立場を主張する背後の経験や神学的伝統などをお互いに理解しあうことによって、違いを乗り越えて聖書の視点を共有することができた。とはいえ、ひとつの結論が提示されたというよりは、むしろ福音的理解の可能性の幅が確認されたと評価されている<sup>14</sup>。

### 3. 新たな包括的視点

グランド・ラピッツでの会議で残された課題は、翌年 1983 年にホイトンで開催された世界福音連盟協議会で継続して議論された。そこでは、より包括的な視点を模索することとなり、「変革」(transformation)と「神の国」(kingdom of God)が鍵の言葉として注目されていった<sup>15</sup>。人が罪から救われることが伝道の中心的事柄であるが、それは、単に個人の問題ではなく、社会構造やシステムの問題でもある。十字架の贖いは一方のみに限られたことではなく、両者に変革がもたらされることとして、より包括的に見る視点が提供された。特に、世界の宣教の現場における伝道は、それぞれのコンテキストの只中でなされることから、人間社会が持つさまざまな罪の現実の中で、個人的罪のみに目を向け、社会の構造的悪から目を背けるなら、真に福音をもたらしたとはいえない。伝道によって福音がもたらされるとは、個人のみならず社会にも変革をもたらすことであり、それらは分離することができないものである。神の国をもたらす共同体としての教会の使命は、こうした社会に対する責任が単に追加されたというのではなく、宣教の本来的使命の中に総合的に含まれているものと認識されるようになったのである<sup>16</sup>。

<sup>14</sup> Tizon, *Transformation after Lausanne*, p.49.

<sup>15</sup> ホイトンの会議の前から、具体的には、WEF がスポンサーとなって、1978 年 9 月、翌年 4 月、さらに 1980 年の 3 月の 3 回に渡って福音派としての「開発」とは何かについて神学的に議論がなされた。そこで中心的に労したのは、ロナルド・サイダー (Ronald J. Sider) であり、彼が編集した、*Evangelicals and Development: Toward a Theology of Social Change* (Exeter, UK: Petermoster, 1981) にその会議の内容を見ることができる。Tizon, "Precursors and Tensions in Holistic Mission," p.74.

<sup>16</sup> この会議の内容を踏まえて出版された論文集が、Vinay Samuel and Chris Sugden,

この会議では、世界各地に見られる世俗の開発 (development) との違いについても議論されている。キリスト者の社会的責任としての「変革」は、一般社会が目指していた開発とは袂を分かつものである。キリスト者は、神の国をこの地上に実現せしめる使命に召されている。従って、キリスト者にとっての「変革」は、一般社会が目指す「開発」とは、その根底にある目的や世界観などにおいて異っている。キリストによる贖罪の十字架においてははじめられた神の業は、個人のみならず社会の構造的悪にもかかわり、社会の根底にも変革をもたらすものであり、だからこそ、その取り組み方は異なってくるのである<sup>17</sup>。もちろん、それは、この地上で完成できるという楽観主義に基づく働きではない。むしろ終末論的完成を待望しつつなされる信仰の業であり、神の宣教への召しに答えることであると議論された。このように、伝道と社会的責任は、より聖書に基づき、終末論的に捉えられていった<sup>18</sup>。

#### 4. 包括的福音の議論と非包括的实践

福音派における包括的な視点は、1989年の第二回ローザンヌ会議で発表された「マニラ宣言」(Manila Manifest) に反映していく。それは、「全教会が全世界に全福音を」というローザンヌ誓約で取り上げられた三つの「全」(whole) がその宣言の骨格となっている。包括的な視点で宣教を捉え、伝道も社会的責任と全人的にかかわることの重要性が強調され、社会的、経済的、文化的、霊的なあらゆる側面における変革をこの全世界にもたすために、全教会が協力して取り組むことが主張された。そして、すでに全人的、包括的な取り組みがなされている教会や団体は、さらにその取り組みを進展させ、同時にそれぞれの協力が必要であると主張された。そのような中で新たな300も越える具体的

---

eds. *The Church in Response to Human Need*. (Eerdmans, 1987) ある。世俗の開発のみならず、当時の解放の神学とも異なる福音派としての取り組みを目指していたこととして注目されるものである。

<sup>17</sup> T. Tienou, "Evangelism and Social Transformation," pp.77-78, E. R. Dayton, "Social Transformation," pp. 54-56.

<sup>18</sup> 開発との違いについては、Tom Sine, "Development: Its Secular Past and Its Uncertain Future," および Samuel and Sugden, "God's Intension for the World,"を参照。解放の神学との違いについては、Tizon, *Transformation after Lausanne* の第3章に詳しい。

な戦略的パートナーシップが生まれた。宣教の主体としての教会、対象としての世界、そして宣教の中身である福音への理解が広がり、同時にその多岐にわたる使命(ビジョン)が明確に示され、個人も教会も宣教団体も全てが結集していった点で大きく評価される。

その後の1990年代は、2000年というミレニアムに向けて、駆り立てられるように様々なプロジェクトが生み出されていった。ところが、2000年を境に、目に見える変化が見られず、やり遂げられなかったプロジェクトも少なくなかった。また、神学的議論と宣教の実践との距離が次第に広がると、実践なき神学は机上の空論となり、神学なき実践はプラグマティックなヒューマンイズムへと傾きかけていった<sup>19</sup>。

第一回ローザンヌ会議以降の歴史を振り返ると、社会的実践への具体的展開は見られたが、教会との関係が神学的にも実践面でも築けなかった。また、教会が遣わされたその地において、「地の塩、世の光」として包括的福音に「生きる」という点で課題が残ると言わざるを得ない。この問題は、福音派の躍進と深く関係していると思われる。確かに、主流派といわれる教会の低迷と比較すると、その躍進は大きな目を見張るものがあった。しかし、次第に教会自体の拡大に心が奪われると、社会の現実から遊離し、自らが安住できる部族化した特殊世界の維持へと逸脱していく。こうした、自己目的化した教会は、社会の闇や地球規模の課題などに責任ある姿勢で臨むことをせず、自己実現を追求する自らのあり方の問題性に目を向けなくなる。さらに宣教の成果が見えやすくなるために、福音が矮小化されていき、結局は気がつくやと社会の闇が、逆に教会の世界に入り込んでしまっていた。

目を世界の教会に向けるなら、包括的福音に生きているかを問わざるを得ない深刻な事態に直面する。たとえば、東アフリカで最もキリスト教化され、近隣諸国のリバイバルの発祥地とされるルワンダで起きた大量虐殺は、キリスト者が自らの所属する集団の拡大と維持に目を奪われていく中で、社会の腐敗が

---

<sup>19</sup> 拙論、「現代の宣教におけるローザンヌ運動」、8頁。こうした不健全な分離は、主流派における、解放の神学にも見られたことであった。プラクシスという、極めて包括的な視点を提示したにも関わらず、政治運動が政治神学から離れ、社会的活動が教会からはなれて社会事業へと変わった。

入り込み、醸造されてしまったことの現実を突きつけてくる。それ以外にも、南アフリカのapartheidの問題、キリスト教国となっているハイチの震災後の混乱など、多くの課題が突きつけられている<sup>20</sup>。同じ神学的・信仰的あり方を共有している私たちが、そうした事態を非難することで、それらに対象化し、線を引いて距離をおくことは、許されることなのだろうか。むしろ、キリストの体なる教会として、それらを自らのこととして捉え、福音的と言われる私たちの社会におけるあり方そのものを検証し、反省と変革を自らに課すことが求められているのではないだろうか<sup>21</sup>。だからこそ、クリス・ライト神学委員長は、福音宣教を危機に追いやるものは、他宗教でも迫害でもなく、神の民の中に入り込んでいる見えざる偶像であるとし、悔い改めと福音派の新たな「宗教改革」を迫ったのである<sup>22</sup>。

もちろん、社会的課題への取り組みがなかったわけではない。しかし、福音派の社会的貢献は、教会においてというよりは、宣教団体や非営利の奉仕団体に負うところが大きく、必ずしもそれらの働きと教会との連携がなされていっ

<sup>20</sup> これ以外にも、ライト氏は *The Mission of God*, 320-321 頁で、90 パーセントがキリスト者とされるインドのナガランドが、インド連邦の中で最も腐敗し、荒れた州であるという報告している。また、バイルートで開催されたローザンヌ神学委員会において、福音的なキリスト教国といわれているタヒチ出身の神学者が、自らの国における地震後のさまざまな混乱は、倫理面も含め、キリスト教化されたことの意義が根本から問われると報告した。こうした反省は、ローザンヌ世界宣教会議が南アフリカのケープタウンで開催されたこととも無関係ではない。

<sup>21</sup> 2010 年のケープタウン会議は、その準備段階を含めて、神学的営みは再び活発になっているといえよう。特に三度の神学会議が重要。第一回の会議は、2008 年の 2 月、タイのチェンマイで「福音の全体」(the whole gospel) をテーマに持たれた。第二回は、2009 年 1 月に、中米のパナマで「全教会」(the whole church) をテーマに開催され、第三回は、2010 年の 2 月にレバノンのバイルートにて持たれ、宣教の現場である「全世界」(the whole world) に焦点が当てられた。三回の会合は、三つの Whole から構成されている。内容は、*Lausanne Occasional Papers* に記載。以下の H.P. No.63-65 を参照。

<http://www.lausanne.org/en/documents/lops.html>

<sup>22</sup> この強いメッセージは、ケープタウンでの 10 月 23 日のプレナリー・セッションでの主題講演で語られた。以下を参照。

<http://conversation.lausanne.org/en/resources/detail/11556>

たとはいえない。キリスト教会全体で一つとなって働きがなされるというより、非包括的に社会的実践がなされているとすらいえよう。また、福音派における宣教の神学的研鑽は、1980 年代にはかなりなされたが、実質的には、1990 年以降の約 20 年間は、1970～1980 年代と比較するなら、神学的議論はそれほど進展していない<sup>23</sup>。

包括的福音の神学的研鑽と実践における証しという両者の重要性は、ケープタウンでの会議で確認された。それは、そこで採択された宣言文は、決意表明 (commitment) として発表されたことにも表れている。すなわち、表明した内容に自ら献身し責任をもって実践する (コミットメント) することの決断である。それは、責任ある決断と行動を伴わない告白との決別を表明することでもある。その決意表明から、半年もたたない 2011 年の 3 月 11 日、日本は地震・津波・原発事故などによる未曾有の災害を経験した。今、私たちは、福音に与り、その福音をゆだねられた存在として、その決意と実践が問われ、同時にその根底にある動機やそれを左右する神学が問われている。

### Ⅲ. 被災者支援における包括性の課題

福音を伝える伝道と社会的責任とはどう関係しているかは、東日本大震災におけるキリスト者の被災支援の取り組みの中で、具体的に問われ続けている課題である。まず、両者がどのような関係にあるかについての議論を紹介しつつ、その議論自体にある課題、さらにそこへの新たな視点の模索を紹介したい。

#### 1. 関係の類型的考察

伝道と社会的責任の関係については、T・アデイエモ (Adeyemo) はさまざまな議論を整理して以下のように、9 つに分類している<sup>24</sup>。

- ① 社会的活動は、人々の目を伝道からそらすもの

<sup>23</sup> Mayers, *Holistic Mission: New Frontiers*, 121. これは、実際に出版されたものの多くは、そうした働きのケーススタディが主なものであった。

<sup>24</sup> T. Adeyemo "A Critical Evaluation of Contemporary Perspectives," pp. 48-57.

- ② 社会的活動は、伝道への背信行為
- ③ 社会的活動こそ良い知らせを告げる
- ④ 社会的活動は、伝道の手段
- ⑤ 社会的活動は、伝道の一つの表現
- ⑥ 社会的活動は、伝道の結果として生まれてくる
- ⑦ 社会的活動は、伝道のパートナー
- ⑧ 社会的活動と伝道は重要度においては等しいが同じ宣教の働きの全く違った要素
- ⑨ 社会的活動は、良き知らせ（伝道）の一部

	A 排他的視点	B 伝道優先性	C 包括的視点	D 区別を前提	E 社会的福音
焦点	魂の救い	優先順位	変革／包括	現場に寄り添う	良い社会の実現
社会的活動	伝道から目をそらすもの／伝道への背信行為	大切ではあるが二次的意義社会的活動は、伝道の手段である	両者がパートナーであるという視点を超え、伝道そのものの社会的広がりを見る。	社会的活動と伝道は重要度においては等しいが同じ宣教の働きの全く違った要素。	社会的活動こそが福音を伝えることである。
視点	二元論的で排他的	二元論的傾向が残る	二元論を超え、包括的視点	現場の只中で発想し、行動する	現場こそ最重要である。
9分類	① ②	④ ⑤ ⑥	⑨？	⑦ ⑧	③

表 伝道と社会的責任の5類型

類型化の問題はないわけではないが、議論をスムーズに進めるために、9分類を5類型に分けて考察することとする。そのために、まず二つの極を想定し、その間に三つの立場を設定すると、表のA～Eの立場に分けることができる<sup>25</sup>。まず、最も対照的に位置づけられ、両極となるのが「排他的視点」（表のA）と「社会的福音」（表のE）である。前者は、社会的活動に対して否定的な立場をとり、後者は社会的活動こそが、良い知らせを告げることとなると考える。「排

<sup>25</sup> D・J・ヘッセルグレイブ（Hesselgrave）は両極の間を4つに分けている。D. J. Hesselgrave, *Paradigms in Conflict*, pp. 117-124 を参照。

他の視点」によると、永遠に関連する魂の救いこそが、宣教の課題であり、それ以外の社会的な働きはむしろ不要であると考える。この極端な立場は、やがて滅びる地上の働きではなく、永遠に関連する魂の救い以外の時間と労力そのものを否定する。

「社会的福音」の視点によると、人間の尊厳が尊重され、正義と平等が具現化することがキリスト者の目指すものである。元来あった豊かな創造の秩序が回復することが福音なのだ。換言するなら、キリスト教的価値観に沿いつつ、より幸いな社会秩序をもたらすことが福音である、とする立場である。被災地支援の現場では、こうした、非宣教的スタンスはむしろ歓迎される。社会的活動こそ彼らにとっては良い知らせなのである。社会的変革や社会的な祝福をもたらすことこそが、その地域にとって福音であるという視点は、宗教を超えて、一般に最も歓迎されるスタンスであるといえよう。だが、このスタンスには、キリストの独自性や伝道して福音を伝えることを見失っていく傾向も否定できない。保守派の排他的なスタンスは、こうしたヒューマニゼーションを求める宣教理解に対する反動と理解することができよう。これらの両極は、1920年代以降の根本主義と近代（自由）主義神学二極化の中で、キリスト教会を二分するほどのことにもなった。上記であげた二つの立場の間に、少なくとも三つの可能性が考えられる。

## 2. 伝道最優先

第一は、保守的な「伝道最優先」（表のB）という視点である。この立場は、しばしば「伝道第一」を標榜する。社会的責任を否定はしないが、あくまでもそれは二次的なものとみなして、積極的にそこにかかわることはない。もちろん、社会的な活動に対してそれなりの支援をし、応援するが二元論的枠組みの故に、依然として、社会的活動は、地上の有限的な領域であり、優先すべきは魂の永遠の救いとされる。

この立場では、被災者支援は、ある意味で、緊急事態の働きであり、それが単なる人道支援に終わることなら、積極的には取り組まない。伝道につながるということが重要なことであるから、そうならない支援活動は、重荷とならざるを得ない。何よりも大切なのは、良い社会が形成されることではないからである。



この立場の不十分さを認識し、社会的責任に目を開いたのが、「包括的優先」と呼ぶことができる。そこでは、伝道と社会的責任とを対立的にみることなく、両者を包括的に宣教に含めている。しかし、だからといって、伝道の優先性を放棄したりはしない。あくまでも、宣教の中心的な働きは、伝道であることが強調されるが、同時に社会的責任にも積極的にかわろうとする立場である<sup>26</sup>。後に取り上げる「包括的視点」に近いものといえる。

実際に、保守的な立場の牧師の苦悩を耳にした。それは、一年ほど支援活動を継続してきたが、自分自身の限界を超えて活動したことや、現実教会の働きに支障が出ているゆえ、支援活動を断念せざるを得ない牧師の心の痛みであった。こうした、牧師の立場をどう理解したらいいのだろうか。

伝道を優先する視点は、社会的活動は、アデイエモが指摘する、④「社会的活動は、伝道的手段である」、あるいは⑤「社会的活動は、伝道の一つの表現である」という捉え方と符号する。とはいえ、被災者支援の現実の中では、こうしたスタンスは微妙な課題を残すのではないだろうか。大震災という危機的状況では、「手段」としての援助は、その背後に別の目的があることであり、それが明らかにされるとき、敬遠あるいは拒絶されるケースがあることを耳にする。キリスト教の背景があることのゆえに、支援が断られることも直接耳にした。支援する側は、伝道の目的はないにもかかわらず、受け手が「布教目的」と判断し、断られることもないわけではない<sup>27</sup>。被災現場では、こうしたことへの細かな配慮が必要とされることは、実際にかかわる中で、痛いほど感じた。支援が次第に長期化する中で、「いったいこうした支援は何のためなのか？」を自問自答せざるを得ない現実におかれるが、そのとき、私たちはどのような視点をもちいるのだろうか。

<sup>26</sup> 包括性と優先性の相互関係についての議論は、Ott and Strauss, *Encountering Theology of Mission*, pp.142-149 を参照。彼らの議論の根底には二元論的枠組みがぬぐいきれない。

<sup>27</sup> 筆者が震災後1ヶ月後に実施した炊き出しの地域は、教会がひとつもなく、ほとんどが氏子によってまとまっていることから、支援が届けられた際、キリスト教団体であることがわかると、断られた。その地域出身の牧師は、何とか自分の故郷を助けたい、しかもキリスト者の愛をもって支援したいという願いをもっていたので、あきらめ切れなかったと伝えられた。

危機的状況を伝道的手段とすること自体に違和感を感じ、むしろこうした中では、私たちの側の伝道ではなく相手の現実寄り添うことがまず大切だとする見方もある。岩手教会ネットワークの近藤愛哉氏の実際に支援をする中からの言葉は重く私たちに突き刺さってくる。彼は、以下のように述べている。

震災後、キリスト者間で飛び交う言葉の中に「宣教のチャンス」「日本が変わるチャンス」「リバイバルのチャンス」というようなフレーズをしばしば耳にして違和感を覚え続けていた。嘆きや悲しみ、痛みが渦巻くただ中であっては、「チャンス」という言葉はあまりにも「キリスト者本位」の軽々しい言葉に思われてならなかったのだ。教会の宣教とは、本心を隠しつつ嘆く者に近付き、「痛み」を食べ物にしながら進められるものでは決してないはずだ。むしろキリスト者一人ひとりが、直接与えられる関わりの中で仕え、痛みを共有することだ、と思わされていた。

私たちキリスト者が、形だけではなく、見せかけでもなく、その価値観や行いの動機や質においてもどれだけ福音に生きる者とされているか、この点にこそ真の福音宣教の鍵があることをこの5か月間つくづく実感させられている。証しをしたいと願う相手の近くに身を置くということは、私たち自身の在り方がより深く明らかにされるということの意味する。どこに希望と喜びを置き、どなたを恐れ、何を基準として生きているのかということがより鋭く問われる<sup>28</sup>。

震災などの危機的状況において、支援活動を伝道的手段とすることに対して、どのように考えたらいいのだろうか。普段の生活ではなく、こうした危機的状況における支援活動という中であっては、伝道へ的手段として活動することは、福音の本当の意味を知らない方々にとっては誤解を招きやすい。信仰者の側で最終的に必要なことなのだから、として納得したとしても、受ける側にとっては、まったく逆のメッセージとなりうる。福音 (good news) が悪しきニュース

<sup>28</sup> 近藤愛哉 「被災地支援と福音宣教の鍵」『クリスチャン新聞』2011年9月4日号の「オピニオン」の欄に掲載。

とすなりうるのだ。伝道的手段としての支援活動というスタンスには、特に震災という現場においては、多くの疑問が残ってしまう。とはいえ、被災者にとって必要なことは地上の生活の安定のみではないはずである。神との関係や真の救いこそ大切であるという確信は、どう支援と結びつくのだろうか。

さて、アディエモが5番目に挙げた「社会的活動は、伝道の一つの表現である」というスタンスは、やや控えめなものと言える。社会的活動をする者が、相手が信仰者となることを意図せず、むしろ、主の愛を行動を持って示すこと、そして自分自身が福音に与ったものとしてその恵みを具体的奉仕という形で表すことである。福音に生きることによって、キリストの愛を示すのである。それは、無償の奉仕に励むということであり、相手が福音を信じるか否かについては、神にゆだねる姿勢である。もちろん、このスタンスも、伝道のためにしているのであるが、自らがそれを持って伝道するというのではない。むしろ、福音によって変えられた私たちが、行動によってその変えられた恵みをあらわしていくことによって、いつかそれに触れる人が主イエスの福音と出会っていただくことを願うのである。伝道は、その意味で極めて間接的になるが、基本的には、伝道のための奉仕活動である。伝道の優先性、重要性は、いずれの場合も保持されている。「直接伝道はしないが、あくまでも、福音を伝えるために支援活動をするのであり、どんなに時間がかかっても、それに向かわない支援はない」とする視点。支援を利用するのではなく、福音を伝えることが究極的支援なのだと考える。

### 3. 区別を前提とする社会活動

次に取り上げるスタンスは、区別を重視する視点である(表のD)。伝道を目的とする支援活動そのものに疑問を持つ場合は、こうした区別を重視することとなる。伝道と社会的責任とを混同することなく区別することである。もちろん、重要性については、同等と考え、アディエモが述べた「⑦社会的活動は、伝道のパートナーである」ということも含まれるが、彼が8番目に挙げた「社会的活動と伝道は重要度においては等しいが同じ宣教の働きの全く違った

要素である」<sup>29</sup>という立場が最も近いといえよう。とはいえ、被災支援という視点から、区別をより強調した立場としてここでは取り上げる。これは、あくまでも伝道は魂にかかわることであり、神との関係に関連するが、それは社会的活動とは区別されるべきであり、働きにおいても区別しようとする立場である。

この「区別」は、被災者支援という現場においては、一般にあらゆる宗教団体において要求されているスタンスでもある。実際に、支援活動が何らかの勧誘や宗教活動として認識されるなら、そこから活動を続けることができなくなるか、あるいは活動が制限される<sup>30</sup>。支援活動に別の目的が入り込むことに対する嫌悪感は、宗教以外にも、政治家、タレント、スポーツ選手、その他のさまざまな支援者にも向けられる。だからこそ、こうした支援者は自らの行為に対して悩みもし、批判の対象ともなる。「売名行為」という不純物が入り込む支援は、もはや支援に値しないという見方は、支援とそれ以外の目的とを切り離すことへと促す。

ところが、現場に滞在した方から、まったく異なる視点で、支援を見ていることを耳にした。その方の話によると、現場の危機的現実では、支援者や支援団体の動機を詮索する余裕などない時期があるのだという。突然被災し、寝る場所、暖をとる手段、水・食料などが絶対的に不足する中では、それがどのような目的があろうとも、「ありがたいもの」として受け取る以外に選択肢はないし、選んでいる余裕すらないのだ。

確かに、新興宗教を含め様々な宗教団体が背後にあるボランティア団体も支

<sup>29</sup> T. Adeyemo "A Critical Evaluation of Contemporary Perspectives," pp. 54-56. アディエモは、区別はしつつも二つを総合的に宣教の働きとして捉えるという点で包括的なものとして取り上げている。

<sup>30</sup> 「ボランティアを通じて隣に」(朝日新聞、2011年11月25日社会面)の記事には、キリスト教系の新興宗教が高速料金の災害車両証明書を交付してもらった添付書類として警察に提出するための「活動証明書」を依頼した際の対応にずれが生じている実態を報告している。布教活動は、当然苦情として報告されるが、一切布教活動をせずに、真剣に活動していた団体が、8月になってその背後に宗教団体があったことが明らかになったことで、微妙な関係になった事例などが紹介されている。

援し続けている。背後に宗教団体があることが、後になって問題になるケースもあれば、初めから宗教団体であるが、宗教活動をしないということで、受け入れられることもある。しかし、実際に最も苦しいときに助けてくれた方々は、宗教を越えてありがたい存在なのだ。

しかし、こうした非常事態の中での支援は、相手が極めて弱い立場におかれていることから、NOを言えない状況となる。そうした中での伝道（布教）活動は、基本的に受け入れがたいものと映ることであろう。「伝道を目的とした支援は、受ける側の弱い立場からみるなら、それは弱みに付け込む卑劣な行為なのだ」として嫌悪感や怒りをもつとしても、それを無視することも、否定することもできないであろう。だからこそ、伝道と社会活動は、切り離すことが大切なのだという結論へと導かれる。

特に、それが公的な領域での支援となれば、この区別が極めて重要なこととなる。具体的な事例として、宮城県の沿岸で、まったく教会のないある地区の小学校で炊き出しのボランティアを実施したときのことを取り上げよう。仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク（東北ヘルプ）を通じての活動であったが、一つの重要なことが伝えられた。それは、決して伝道（布教・宗教活動）をしない、ということであった。その地区には、キリスト教会はない。以前にキリスト教系の団体であると明示した上で物資を運んだ際、断られたたという経緯があったとも伝えられ、緊張が走った。その炊き出しは、日系ブラジル人教会の方々とともに行ったブラジル式バーベキュー（シュハスコ）であった。その被災地域出身の牧師とともに活動したのであるが、あくまでも日系ブラジル人の活動として、教会やキリスト教的要素は出さないという約束であった<sup>31</sup>。こうした地区での支援活動では、この明確な区別なしには、入ることが許されない。伝道（宗教活動）と支援とを区別しない活動は、受け入れられないこと

<sup>31</sup> 公共性の高い避難所（宮城県の小学校）での活動（炊き出し）であったが、教会からは子供たちへのさまざまなプレゼントや煮物も持っていくことになっており、その中にイースターエッグが入っていた。また、プレゼントには聖書の言葉が張ってあった。宗教的説明をしないことを条件に、持ち込み許可が出た。また、聖書の言葉はすべて剥がした。

であり、マナーに反することでもあった<sup>32</sup>。

#### 4. 包括的視点：真に福音となる社会活動

第三のスタンスは、包括的スタンスと呼べるものである。それは、両者の区別に焦点を当てるのではないし、両者の係わり合いかたを、包括的に見ようとするとしてもない。むしろ、そうした区別自体に疑問を持ち、それらを超えた新たな視点を模索し、そこから伝道も支援も見直すという立場である。

確かに被災地における社会的支援は、伝道とは区別される必要があるかもしれない。しかし、区別を前提としたとしても、キリスト者の社会における働きが、まったく福音とかわからないものなのだろうか。人間に本当に必要なのは、肉体的、精神的、社会的、経済的領域のみなのだろうか。深い魂の領域についてまったく触れないことで、十分といえるのだろうかという問いは常に重要である。はたして、伝道をまったく切り離して、社会活動することで、教会としての働きを完成したといえるのだろうか。もちろん、伝道と社会的責任に関する議論を、このような未曾有の大震災における支援という特殊なケースですること自体に無理があるのかもしれない。しかし、人は霊的領域を含めて人なのであり、全人的な支援は、部分を切り分けることをせずに、包括的にかかわることによって実現するのではないかと考えるのがこの包括的視点である。

表の「C」にあたる、包括的視点は、単に伝道と社会的責任の双方がパートナーである、とする見方で満足しない。D・ポッシュは、伝道プラス社会的責任という二つを結び付けるといふ発想そのものに課題があるとして、次のように述べている。

宣教を二つの分離した要素から成るものと捉えた瞬間に、その二つが原則的にそれぞれ独立したものであると認めることになる。社会的側面なしに伝道をすすめる、伝道的側面なしにキリスト者の社会参加をなすことが可能である、と暗に言っているのである。それ以上に、もし、一つの要素が第一で、もう

<sup>32</sup> クラッシュ・ジャパンの支援活動の多くは、個人的つながりから広がっている面が強く、長期的な支援で築かれていった信頼関係を通じて信仰的な話しは可能であった。

一つの要素は第二であると示唆するならば、一つは本質的であり、もう一つは任意のものだということになる。これがまさしく起きたことなのである<sup>33</sup>。

こうした、課題に対して取り組むなかで出てきたのが「変革」をモチーフとして捉えようとする、ホイートンで開催された世界福音連盟協議会（ホイートン 83）の視点である<sup>34</sup>。それによるなら、伝道にも社会的次元があり、社会的責任にも霊的な側面があるとして、双方が不可分にかかわりあっていることに目を向ける。伝道によって福音がもたらされるとは、個人のみならず社会にも変革をもたらすことであり、そこには、社会的、経済的、政治的、霊的な要素を個別に扱うのではなく、統体として捉え、それらすべてにかかわることこそが、福音（good news）なのである。そして、神の国の到来はまさにそのような変革があらゆる次元においてもたらされることであり、教会はその完成を目指して神からこの世に派遣されている特別な存在なのである<sup>35</sup>。

ここで、福音が実に豊かな恵みで、包括的なものであることを受け取る上で、罪の理解は、重要となる。

罪の結果と悪の力は、人間の人格のあらゆる次元（霊的、肉体的、知的、関係的）を墮落させてきた。それらは、歴史上のすべての文化と全世代にわたり、文化的、経済的、社会的、政治的、宗教的な実態にしみ込んできた。それらは人類に対しては測り知れない不幸を、神の被造物に対しては測り知れない損傷を引き起こしてきた。この暗い背景に対して、聖書の福音は実に喜ばしい良い知らせである<sup>36</sup>。

包括的な視点からみるなら、罪は個人のあらゆる次元のみならず、文化、経済、社会、政治、宗教、さらには被造物すべてに人間の罪の故の混乱、腐敗、

<sup>33</sup> D. ボッシュ、『宣教のパラダイム転換・下』、259頁

<sup>34</sup> Wheaton '83 の公式文書は、Samuel and Sugden, *The Church in Response to Human Need*, pp. 254-266 に掲載。

<sup>35</sup> Sugden, "Mission as Transformation: Its Journey among *Lausanne*, pp. 65-68 を参照。

<sup>36</sup> 『ケープタウン決意表明』、32-33頁

墮落、破壊が浸透している。十字架の贖いは、個人の罪ならず、人と人との社会的次元、さらには見えない主権者まで含む宇宙大の恵みなのである。福音自体が包括的で豊かなものであることに目が開かれるなら、福音を非包括的に理解したり、側面に分析して対立的に考えたり、一側面にのみを偏って強調すること自体が、この大なる神の業にそぐわないことになるであろう。福音をまるごと受け止めるとは、罪も救いも、十字架の奥義の豊かさも、聖書に書いてある通りをそのまま受け取ることでもあるのだ。

福音には、個人における神との関係の回復のみならず、個人と個人、個人と社会との関係を新たに変え、個人を取り巻く社会に変革がもたらす力があると信じる。だからこそ、福音を委ねられ、そこに召されたものとして伝道を包括的にみるのである。したがって、罪や赦しについても、神との関係における個人の罪だけに目を向けるのではなく、神との関係における罪は人との具体的な関係に現れるものとしてみる。それぞれに分けることなく、むしろ双方を同時に扱うことを重視する。さらに社会的罪や社会における赦し、さらには社会の背後における目に見えない悪の支配をも含めた包括的視点から伝道や社会的参与をみるのである<sup>37</sup>。

山森鉄直氏は「共生」という生態学で用いられる概念を用いて福音の包括的視点を説明する。共生（シンビオティック）は、ギリシャ語のシン（共に）とバイオ（生命）が組み合わさった生物学的用語で、「二つの機能の異なった生物が、相互の利益のために、調和を保ちながらいっしょに生活すること」<sup>38</sup>を意味している。双方に良い影響を与えながら共に生きる自然界に見られる「共生」をヒントに、教会と社会の関係を捉えようとする。キリスト者は社会にたいして、他では決して提供できないものをもって仕えることへと召されているのである。とはいえ、現実にはそうならないことに山森は警鐘を鳴らす。たとえば、犬につく蚤や、鯨に寄生するふじつぼのように、相手に害を与えながらいいところだけと吸い取る寄生虫のようなあり方である。それを防ぐために、置かれた状況、すなわちその歴史的、文化的、社会的コンテクストに適合しつ

<sup>37</sup> Tienou, "Evangelism and Social Transformation," p. 178.

<sup>38</sup> 山森、「共生的任務をめざして」、32頁

つ共にいきる「状況的共生」(contextual symbiosis)が重要であるとしている<sup>39</sup>。ともに生きる中で、私たちの存在が本当の意味でその社会において福音となるのだろうか。それこそが、この視点で考えなくてはならないことなのである。

では、被災支援の現場で考える場合、この視点から考えるなら、どのようなスタンスで活動することがもめられるのであろうか。少なくとも、被災支援そのものが、時間の経過とともに変化する具体的なニーズや状況に対応することが求められる。この日本の社会に派遣されているキリスト者共同体として、その現場における「共生的任務」が何であるかを見出すことは極めて困難な作業であろう。しかも、それが全体の復興とまったく別のものとして個別にみるのではなく、その中で真の意味で福音となることが重要である。しかもそれは、社会が目指そうとしても目指せない何か、すなわち福音のみが神の恵みによって生み出すことのできる真のシャロームをこの地上にもたらすことのためになすべきことがあることを私たちは求められているはずだ。それを抜きには福音を伝えるものとは言えないであろう。

真に福音となる社会支援が何であるかは、キリスト者が聖書から導き出し、行動する責任があるのではないだろうか。そこには、あらゆる次元の考察と行動とが不可欠となる。それは、一教会や一キリスト者では不可能なのかもしれない。あらゆる団体が神の名のもとに結集して初めて可能であろう。しかし、その結集は必ずしも組織的結集ではないと思われる。それがどのようになされるかにも、包括的視点が求められることであろう。

#### IV. 包括的福音に生かされる

包括的福音をどう捉えるかについての神学的議論は重要である。しかしそれと同時に重要なことは、真に福音に生きることである。もし、福音が真に包括的であるなら、「生きる」という以上に「生かされる」というべきであろう。その場合、私たちに何が求められているのだろうか。少なくともここでケープタウン決意表明の光に照らして三つの提案をさせていただきたい。それから神学

<sup>39</sup> 山森、「共生的任務をめざして」、40-41頁

的に残された課題に触れたい。

#### 1. 「教会の祝福となる」から「教会が祝福となる」へ

まず問うべきは、誰のための教会なのだろうかという点である。まずそれは主ご自身のためであろう。主を礼拝する共同体である。同時に、世に向かっては、神から派遣される選びの民である。主が愛しておられる滅びゆく民のために先に選ばれた存在なのである。アブラハムを選ばれた時、それは、祝福の基となるためであった。神の民を通して神は世に祝福をもたらすことを願っておられる。民を選んだのは、その特定の一部の民だけが祝福を受けるためではない。その一部が祝福されるのは、その周りを祝福するためなのである。もし、教会が自分たちの数が増えることを喜び、教会が安定することが目的となってしまうたら、それこそ、教会の自己目的化であり、本末転倒と言わざるを得ない。イエスの時代にユダヤ教が陥った同じ過ちに陥ったといえないだろうか。

教会が遣わされた地の祝福となるということを真の意味でとらえようとするなら、物質的、経済的、社会的復興を無視することもなければ、それで満足することもない。なぜなら、霊的、すなわち真の神との関係回復が含まれていないからである。それらが包括されて初めて祝福といえるのではないだろうか。旧約聖書のシャロームの意味を考えるのなら、その回復には、神との関係からお互いの人間関係、さらには社会的関係、環境との関係など実に豊かな内容が含まれている。それは、社会的領域に少し携わることで、「少し包括的になった」と教会の健全さを喜ぶような姿勢ではない。むしろ、主がその社会に遣わされた教会として社会の痛みを主とともに痛み、もがき、主からの真の希望に生きる中で、祝福となるために、仕えることではないだろうか。それは、少なくとも教会のためではない。主のため、主が愛する民のために、教会がどうあるかを問うのだ。その問い方が、非包括的になるとき、きっと違和感を持つに違いない。

#### 2. 聖書が語る「神の使命」<sup>ミッション</sup>から見る

「包括的福音」は、どの枠組みから見る事が望ましいのだろうか。「教会」という枠組みでも、世俗社会の枠組みでもなく、聖書が明らかにしている、「神

の「大いなる<sup>ミッション</sup>使命」という枠組みから見るのが大切である。そこにおいては、宣教は、人間の業ではなく、滅びゆく人間とその世界を愛するがゆえになされる神のみ業が遂行されることである。旧約聖書において約束された贖いの業は、イエス・キリストにおいて成就し、神の国の福音は、始まったが、完成していないのである。

見失ってならないことは、神の使命に召された神の民が、教会を中心に考えるのではなく、神の計画、神の使命、すなわち神の宣教又は<sup>ミッション</sup>使命から私たちの働きを捉えることなのである。とはいえ支援を続ける中で、その土地の人々が神と和解し、新たにされるといふ奇跡がいつどのように起きるのかは誰にもわからないであろう。それは人間の計画、思い、予想を超えたところでなされる神のみ業であるからだ。主の領域を主にゆだね、私たちは任された使命を果たすことが求められる。それは、口で福音を伝えることも（伝道優先）、相手の立場になって、伝道と活動との区別を前提とした働きにひたすら仕えることも、結果的に用いて神の前に悔い改め、福音を信じることへとつながるよう導くのは、神ご自身であり、その神の働きのために私たちが献身しているのである。時は神の御手にある。人間的な計画や戦略を献げて、この神の御業に存在をかけること、それが私たちの献身（＝コミットメント）なのだ。神こそ、その民の回復を誰よりも包括的にご覧になっているからである。

だから、神の大いなる使命のもとで、様々な宣教団体による NGO にも近い働きと、教会とが認め合い、協力しあって、主の大いなる働きに仕えることが求められているのではないだろうか。そして、そのことが被災地において実際に起きていることを見るとき、それは大きな一歩であり、日本における、あるいは世界における宣教の大切なこととして伝えられる必要がある。このように、神の民が神のみ思いのもとで協力して仕えていくことによって、いよいよ地域の人の目に、その団体でも、教会でもなく、その背後におられる大いなる方が映し出されることを心から願っている。

### 3. 契約の愛に生かされ、全人的に人を愛する

ケープタウン決意表明は、ここに新たな視点を提供している。それは、「全人格的な愛の実践」という視点である。ここでいう愛は、単なる感情ではない。

契約に基づく覚悟と行動を伴う愛である。

本決意表明（コミットメント）の枠組みとなっているのは、愛という言葉である。愛は契約上の言葉である。聖書の契約、すなわち旧約と新約は、失われた人類と損なわれた被造物に対して手を差し伸べられる、神の救済の愛と憐れみの表現である。この契約は、私たちの応答の愛を求めている。私たちの愛は、契約の主に対する信頼と従順と熱心な献身（コミットメント）とにおいて表現される<sup>40</sup>。

この視点は、包括性を抽象的な議論の枠ではなく、愛の実践という、全人的行動を求める聖書の言葉から捉えている点で重要である。真の愛は、魂だけを扱って、食べるものや水を軽視したり、肉体の痛みを無視することはできない。また、社会的、経済的、精神的に健全になればそれでよしとすることも出来ない。すなわち神に愛され、神を愛する者が、その愛に押し出されて人を愛するとき、非包括的関わりに痛みを覚え、包括的にかかわるよう自らを提供する。

たとえば、わが子を受愛するとき、魂だけを愛して、虫歯の痛みにもたえるとき、「それは地上の一時的な領域だから」といって無視するだろうか。自らも痛み、ともに病院に駆けつける。健康で頭がよければ、心が罪で腐っていてもかまわないなどとは思えるだろうか。愛するとはその存在を大切にすることであり、それは非包括的なかわり方に、耐えられない。

この決意表明が「愛する」という動詞を多用していることは、全人的包括性への誠実な歩みへのチャレンジでもあり、そうしてこなかったことへの悔い改めの迫りでもある。人間の愛は時に薄れ、不誠実なあり方へと落ちる可能性が付きまとう。だからこそ、その現実を見出したならそれを悔い改め、主の十字架の前に出て献身を新たにさせていただくのである。それがあのケープタウンでの世界宣教会議においてなされたのだといえよう。しかし、それは始まりに過ぎない。もし改めなければならないことに直面したら、どこから落ちたのかを問い、悔い、改めることなしに、やり方だけを変えて物事を継続していくな

<sup>40</sup> 『ケープタウン決意表明』、11頁

ら、同じ失敗を繰り返すことになろう。もちろん、やり方を変えることは重要である。それでも繰り返すならそれ以上別の課題に目を向ける必要があるということに気づく可能性に一步進むことだからである。ただ、キリスト者は、全人的、包括的といいつつ、同じ失敗を繰り返してこなかっただろうか。被災支援の中で、そのことに気づいたなら、そこから自らを問い直す必要があるのではないだろうか。「変革」、「神の国」あるいは「全人的愛の実践への呼びかけ」などの視点が提供された。それらをどう受け止め実践し、それを内在化し、伝えているか。その総合的な取り組みは始まったばかりであろう。

### 参考文献

- Adeyemo, Tokunboh, "A Critical Evaluation of Contemporary Perspectives." In *Word and Deed: Evangelism and Social Responsibility*, Bruce J. Nicholls ed., pp.41-62. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1985.
- Bosch, J. David, "In Search of a New Evangelical Understanding." In *Word and Deed: Evangelism and Social Responsibility*. Bruce J. Nicholls, ed. pp. 63-83. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1985.
- ボッシュ、デイヴィッド 『宣教のパラダイム転換・下』 東京ミッション研究所訳、新教出版社、2001年
- 第1回ローザンヌ世界宣教会議 『ローザンヌ誓約』 宇田進訳  
<http://www.lausanne-japan.org/ローザンヌ誓約/> (2012/4/3 参照)
- 第3回ローザンヌ世界宣教会議 『ケープタウン決意表明』 日本ローザンヌ委員会訳、いのちのことば社、2012年
- Dayton, Edward R., "Social Transformation: The Mission of God." In *The Church in Response to Human Need*. Vinay Samuel and Chris Sugden, eds. pp.52-61. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1987.
- Hesselgrave, D. J., *Paradigms in Conflict: 10 Key Questions in Christian Missions Today*. Kregel Publications, 2005.
- ジョンソン、マーク 『心のなかの身体—想像力へのパラダイム転換』 菅野盾樹・中村雅之訳、紀伊國屋書店、1991年
- 関西ミッション・リサーチ・センター (KMRC)／日本福音同盟編 『伝道と社会的責任—グランド・ラピッツ・レポート』 (誰もが知りたいローザンヌ宣教シリーズ21) 唄野隆訳、KMRC、1984年

- 編 『シンプル・ライフ・スタイルへのすすめ』 (誰もが知りたいローザンヌ宣教シリーズ20) 三ツ橋信昌訳、KMRC、1985年
- 近藤愛哉 「被災地支援と福音宣教の鍵」 『クリスチャン新聞』 (オピニオン) 2011年9月4日号
- Myers, Bryant, "Holistic Mission: New Frontiers." In *Holistic Mission: God's Plan for God's People*. Brian Woolnough and Wonsuk Ma, eds., pp. 119-127. Eugene, OR: Wipf and Stock Publishers, 2010.
- Nishioka, Billy Yoshiyuki, *Rice and Bread: Metaphorical Construction of Reality*. Ph.D. dissertation, Fuller Theological Seminary, School of World Mission, 1997.
- 西岡義行 「現代の宣教におけるローザンヌ運動」 『宣教学ジャーナル』 第4号 5-25頁、2010年
- Ott, Craig, Stephen J. Strauss, with Timothy C. Tennent, *Encountering Theology of Mission: Biblical Foundations, Historical Developments, and Contemporary Issues*. Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2010.
- Samuel, Vinay and Chris Sugden eds., *The Church in Response to Human Need*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1987.
- Scherer, James A. and Stephen B. Bevans, eds. *New Directions in Mission and Evangelization 2: Theological Foundations*. Maryknoll, NY: Orbis Books, 1994.
- Sider, Ronald J., *Evangelicals and Development: Toward a Theology of Social Change*. Exeter, UK: Petenoster, 1981.
- Stott, John R. W., *Christian Mission in the Modern World*. Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1975.
- Sugden, Chris, "Mission as Transformation: Its Journey among Lausanne." In *Holistic Mission: God's Plan for God's People*. Brian Woolnough and Wonsuk Ma, eds., pp. 31-36. Eugene, OR: Wipf and Stock Publishers, 2010.
- Tienou, Tite, "Evangelism and Social Transformation." In *The Church in Response to Human Need*. Vinay Samuel and Chris Sugden eds. pp.175-179. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1987.
- Tizon, Al., *Transformation after Lausanne: Radical Evangelical Mission in Global-Local Perspective*. Eugene, OR: Wipf and Stock Publishers, 2008.
- . "Precursors and Tensions in Holistic Mission: An Historical Overview." In *Holistic Mission: God's Plan for God's People*. Brian Woolnough and Wonsuk Ma, eds., pp. 61-75. Eugene, OR: Wipf and Stock Publishers, 2010.
- 宇田進 『福音主義キリスト教とは何か』 いのちのことば社、1984年

- Utuk, Efiang S., "From Wheaton to Lausanne." In *New Directions in Mission and Evangelization 2: Theological Foundations*. James A. Scherer and Stephen B. Bevans, eds., pp. 99-112. Maryknoll, NY: Orbis Books, 1994.
- Van Engen, Charles, *Mission-on-the-Way: Issues in Mission Theology*. Grand Rapids, MI: Baker Book House, 1996.
- Wright, Christopher J. H., *The Mission of God: Unlocking the Bible's Grand Narrative*. Intersarsity Press, 2006. 邦訳 (5章まで) クリストファー・ライト 『神の宣教—聖書の壮大な物語を解く』 第一巻 東京ミッション研究所訳、いのちのことば社、2012年
- 山森鉄直 「共生的任務をめざして」『難民への伝道』(誰もが知りたいローザンヌ宣教シリーズ5)、30-44頁、KMRC、1986年

(東京聖書学院教授、東京ミッション研究所総主事)